

書き残したい満州からの引き揚げ

山形県 飛渡 キミノ

私は四十五年前満州国黒河省におりました。昭和十五年に渡満し二十一年六月に引き揚げて参りました。黒河省から無蓋車に乗って引き揚げるとき、ソ連軍の爆撃にあいたくさんの友人が目の前で死んで行きました。

一歳三か月の長女と二人で北安省で終戦を迎えました。日本の兵隊さんが兵舎を明け渡し、飯ごうと水筒だけの丸腰で次々とソ連に連行される姿を見て、これから私達はどうなのだろうか、泣くに泣けない思いでした。

主人はどうしたのか、生きているのか死んだものか何もわかりません。ソ連兵に殺されるよりも子供を殺して自分も死ぬ決心をしました。でも子供の顔を見ると殺すことはできませんでした。だんだん寒くなるばかり、引き揚げ命令が来ました。着る物はもちろんお金も食料もなく、乾パン三袋と水だけでした。栄養失調とマラリヤ

で次々と人が貨車の中で死んでいきました。死んだ人達を、貨車が山の中を通るときには山に捨て、鉄橋の上から川に捨て、やっと十日目に奉天に着きました。精も根もつき果てて、子供をおんぶすることもできず歩くこともできません。みんな自分のことで精一杯なのです。ここまで来て死んではおられないと思い、最後まで大事に持っていた時計を売って「タバコ」を買い、日本人に逢ったときは「タバコはいかがですか」と、中国人には「ヤンジローマイマイ」、ロシア人には「シガレット」と言いながら生きて帰るために一生懸命がんばりました。何とか米と高粱を少し買うことができて、おかゆを作って食べたときのおいしかったことが今でも忘れることができません。

ある日、少年義勇隊の少年たちが栄養失調で髪の毛が抜け、青腫れに腫れた様子でやってきました。「お腹がすいた救けて下さい」と手を合わせて言ったので、粟の大幅餅をあげたら「一生忘れません」と言いました。そして「内地に帰るまで頑張ろうね」励ましました。あくる朝、高粱のおにぎりを作って行ったら、三人の少年は重

なり合って死んでいました。どんなにお腹がすいていたか、どんなに淋しかったか、今の若者達に聞かせなければ、見せてあげねばと思います。私は今では一粒の食物も決して粗末にすることはできません。引き揚げて来ても決して棄ててはありませんでした。しかし、今は三人の子と六人の孫に囲まれて幸せな毎日を送っています。中国から残留者の人達が来日するたびにテレビの前で泣きながら見ております。ご両親に逢えなくても、せめて親戚の方でも逢っていたらいいと願っております。親と離れ他国で他人に育てられどんなに淋しかったか、内地へ帰れたかったか、中国で暮らした者でなければわかりません。中国で亡くなった友人達の供養をしてやりたい一心で、四国八十八か所、西国、阪東、秩父と観音様の巡礼も主人と二人で昨年まで一めぐりすることができました。

佳木斯から遠い山形への旅路

山形県 村岡 俊子

内地で教員をしていた夫が、昭和十六年に満州国三江省・県公署教育課視学として赴任したのは、当時の国策に沿って大陸に羽ばたこうという志を実行したからであつた。

翌年春には私も一子を連れて海を渡つた。

十八年から省の中心地チャムス市の樺川県官舎に住んだ。収入は、ゆうに、内地の二、三倍はあつたらうか。

「五族協和」を唱えながら日本は支配国。配給品には特配もついた。

二十年頃から官舎内の主に召集令状が届くようになって留守家族が増え、夫は食料増産監督のため一か月間も出張が続いたり、戦争の影は徐々に忍び寄っていたのに、知らぬまま不安も抱かずになっていた私であつた。夫三十五歳、私三十歳、長男小一、長女二歳。悲劇の始まる八